

第12回 現代世界の系統地理的考察

資源と産業編

世界の林業・水産業を見てみよう

監修・講師

仲田莉果
学習のねらい

日本は世界有数の広大な海と森林に恵まれた国である。わが国の漁業や林業の歴史は古く、我々の生活や文化に深く根づいている。しかし、一方で安い外国産品が流通し、現在は木材と水産物の輸入大国となっている。また、世界では魚介類の乱獲や森林の乱伐により、貴重な水産資源や森林資源が枯渇するという懸念も高まっている。世界と日本の林業・水産業の現状と課題を知り、資源の持続可能性（サステナビリティ）について考えていくことが大切である。

今回のポイント

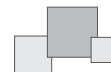
- 世界の林業
- 世界の水産業
- 日本の林業・水産業

世界の林業

森林は、木材を供給する役割だけでなく、国土や水資源の保全、地球温暖化の防止、生物多様性の維持などさまざまな機能を持っている。過去には乱伐によって森林が減少し、生態系の破壊や土壌の流出、永久凍土の融解などが深刻化し、現在では植林をはじめとする森林資源の保全が行われている。

世界の森林には、おもに広葉樹からなる熱帯林、低緯度では常緑広葉樹、高緯度では落葉広葉樹と針葉樹の混合林となる温帯林、樹種のそろった針葉樹からなる亜寒帯林がある。軽くて柔らかい針葉樹は加工しやすく、建築材料や製紙原料となる用材として幅広く利用されてきた。また、木材生産のために、苗木を植えて育てた人工林の多くが針葉樹である。

広大な針葉樹林を持つロシアやカナダは、世界有数の木材輸出国である。これらの国々は世界の森林面積ランキングでも上位を占め、そこで生産される木材は世界中に輸出されている。こうした木材輸出国の伐採は、フェラーバンチャーやプロセッサーといった巨大な重機を用いて大規模に行われ、効率的に木材の出荷ができるようになっている。日本の森林の多くが山地にあるのに対し、北欧やロシアの森林は平地に広がっており、作業道も整備されているため、大型機械を導入しやすい。日本と比べて圧倒的に生産コストが低いため、より安く木材を出荷することができるのである。



■ ■ ■ 世界の水産業 ■ ■ ■

近年、健康志向の高まりや経済発展の進む途上国での食生活の変化などにより、世界的な魚の需要量が増えている。最近では、養殖業の発展が著しく、養殖業生産量が漁業生産量を超えている。養殖業とは水産物を人工的に生産する漁業のことであり、日本でも古くから行われている。世界銀行の報告によれば、2030年には世界の食用魚の3分の2を養殖魚が占めると予測されている。特に中国の生産量の伸びが顕著で、その多くが海ではなく河川や湖沼で行われる内水面養殖業である。コイ科を中心とした淡水魚の養殖や、輸入サーモンの消費が拡大している中国では、今後も水産物の需要が増えることが見込まれている。

一方で、問題視されているのが漁船漁業による漁獲生産量の低下である。日本・EU・アメリカといった先進国では低下傾向がみられ、1980年代後半以降世界の生産量は横ばいになっている。原因として考えられているのが乱獲による資源の減少である。太平洋クロマグロをはじめ、水産資源を保護・管理する動きが世界的に強まっている。

■ ■ ■ 日本の林業・水産業 ■ ■ ■

日本は国土の3分の2を森林が占め、1955年頃までの木材自給率は100%近い水準であった。しかし、高度経済成長期に木材需要が急増すると、海外から安価な木材の輸入が増え、自給率は大幅に低下していった。こうした長期にわたる生産量の減少、国内市場の縮小により、林業従事者に若い担い手が不足し、高齢化が進んでいった。その結果、森林の管理や保全がままならなくなり、より一層生産が減少することとなった。

近年では、バイオマス燃料等による木材需要の拡大を背景に自給率は回復傾向にあり、戦後植林された人工林が成長して利用可能期を迎えていることなどからも、日本の林業に明るい兆しが見られる。

日本の漁場のひとつである北西太平洋は、黒潮と親潮がぶつかる世界最大の漁場である。1950年ごろには水産物の自給率は100%を超えるほどの活況であった。しかし、排他的経済水域の設定や二度の石油危機によって、大型船で数か月かけて漁を行う遠洋漁業は衰退していった。また1980年代後半からは水産物の輸入が急増し、それとともに自給率が減少し、日本は世界有数の水産物輸入国となった。現在の自給率は60%ほどになっている。

近年では、近畿大学水産研究所によるクロマグロ完全養殖をはじめ、最先端のバイオテクノロジーを用いた日本の養殖技術が注目されるようになった。乱獲によって減少した資源の適切な管理とともに、日本の水産業を活性化させる手だてとして注目されている。